

第6回 『沙石集』

次の文章は鎌倉時代に成立した仏教説話集『沙石集』の一節である。問題文を読んで、設問に答えよ。

中比、南都に^{注1}学生ありけり。^{注2}他界の後、弟子の僧、^(a)かの生所おぼつかなく思ひて、本尊にぞ祈念しける。

ある時、春日の御社へ詣づるに、道にて師匠行き逢ひぬ。^{注3}夢の心地しけり。

「御房の法師が生所をゆかしく思はるる、^(b)時に見せ申さん。^(c)いざ給へ」

と云ひて、春日山へ入りけり。^{注4}さて見れば、興福寺の如くなる寺あり。僧坊ども多し。かの室へ入りて、

「^(d)ここにて法師が様見給へ」

と云ふ。見れば、^{注5}講行の始まると覚えて、面々の室より装束して、僧ども出仕して、講堂の中になみ居つ。

問答論議、常の如くしけり。

その後、空よりふりふりと落つる物あり。釜なり。また落つる物あり。^{注6}獄卒なり。^{注7}銚子器物等、落ち落ちしけり。

さて獄卒、釜の中の銅の湯を銚子に入れて、^(e)器物をもて次第に座の僧に引きけり。これを

受けて飲みつつ、悶絶して息絶えて、皆、身も燃えて、灰の如くになりぬ。^(f)獄卒も釜も器物もまた皆失せぬ。

あさましく見る程に、^(g)半時許りありて、また次第に出生して、本の如くになりて、また房々へかへり入りぬ。

「いかに御房、我がやうは見られつるか。^(h)これは仏法を名利のために学する故に、^{注8}この苦患を受くる事絶えず。

さすがに仏法を学びし故に、⁽ⁱ⁾論議問答するなり。名利を離れて修行すべかりけるを、口惜しき道に入れり」^(j)

と泣く泣く語りけり。さて、送られて山を出づ。本房へかへりて夢の覚めたるが如し。^(k)

かの僧、^(l)道心発して修行に出づる後は、その行方を知らずといへり。因果の道理、違ふべからず、慎むべし。慎

むべし。

語句

○なかごろ「中頃・中比」**名**。そう遠くない昔。

○かくしゅう「学生」**名**。①大学寮および国学が学ぶもの。

②大寺で、学問・修行を専門にする僧。③学問・学識。

○しゅうじょ「生所」**名**。①仏教語。①出生地。

②来世で生まれ変わる所。

○まうづ「詣づ」**動**。①うかがう。参上する。

へ行く「来」の謙譲語

②神社・仏閣にお参りに行く。参詣する。

○ばう「御坊・御房」**名**。①寺院や僧の住む所に対する敬称。

②僧の敬称。お坊さま。

○いざ給へ連語。さあはいらっしゃい。さあ行くように。

○ごとくなり「如くなり」**助動ナリ型**。へ助動詞。如し**用**+

断定の助動詞なり。

①まるでこのようだ。へある事柄を他の似ている事柄に

比べたとえる意。

②くと同じだ。へある状態が他の状態とよく似ているか

同じである意。

○なみるる「並み居る」**ワ上二**。並んで座る。列席する。

○ばかり**副助**。①おおよその**範囲・程度**

ア(範囲)くごう。あたり。へ**時・所**を表す語行く

イ(量)くぐらい。くほど。へ**数量**を表す語に付く

ウ(程度)くほど。くぐらい。へおもに**用言の終止形**に付く

②**(限定)**くだけ。くだけだ。

○さすがに**副**。そうはいってもやはり。

○ほんばう「本坊」**名**。寺で、住職の住む建物。

○だうしん「道心」**名**。へ**仏教語**。①仏教を深く信仰する心。

②十三歳または十五歳以上で仏道に入った人。

また、一般に仏道修行をする人。